

# 一般質問 淡水生物が絶滅の危機 水門開放で湖山池が高塩分化

「ヒシヤアオコ」の大発生で悪臭の生活被害が出ている湖山池の水質を浄化するため、県が湖山川の水門を開放、池の塩分濃度を上げたところ、県特定希少生物であるカラスガイが死滅するなど淡水性の動植物が危機に瀕している。計画の見直しを」と12月7日の本会議場で登壇し、一般質問しました。平井知事は「地元の人々が出した方向で進めるしかない。違う生態系を引き起こすことは折り込み済み」と答弁され、議論は平行線のままでした。また、学校の安全についても尋ねました。

湖山池は湖山川で千代川と結ばれていましたが、治水対策のため、直接、賀露港に注ぐように昭和58年に河川改修した結果、真水に近い汽水湖だったものが、塩分濃度が上昇し、農地に塩害が生じました。そこで、

湖山川の水門を閉鎖し、再度、淡水化したところ、水の循環が失われて水質が悪化。ヒシヤアオコも異常発生し、悪臭などの生活被害も生じたため、昨年3月水門を開きました。東郷湖程度の塩分濃度になるはずで



カラスガイの標本を県立博物館で借り、壇上で質問しました。

したが、12月時点では、中海並みの非常に高い濃度になっています。

湖山池は生物多様性に恵まれ、淡水性の動物は県のレッドデータブックに記載された16種を含む194種が確認されています。しかし、この高塩分化で、鳥取県が特定希少野生生物に指定したカラスガイは、保護のため移植したものの全滅。トンボの幼虫のヤゴは汽水では生きられないのでトンボ類も来年以降は姿を消すと心配されています。事前に地元の生物学者が県に何度も警告されていたそ

うで残念に思います。

県は住民の意向に沿ったとしていますが、生物体系が激変することの説明は十分はなされないままアンケートが実施されていたと指摘。この際、水門を一度閉じて、急いで塩分濃度を下げるときではと質問いたしました。

## 生態系の変化 織り込み済み

知事の答弁は「議員の質問は生物多様性に絞ってなされたが、この問題は、漁業、農業、生活環境とパッケージで考えるべきだ」という反論に始まり、「住民、漁業者、農業者が譲り合う形で結論を出し、それに県が従ったもので、独断専行したわけではない。デモクラシーの産物だ」「湖山川の改修は不可逆的な変化をもたらし、従来とは違う生物系になることは織り込み済み」などでした。持ち時間の制限もあり、議論は平行線に終始し、質問技術を磨かねばと反省しました。

## 技能主事を管理専門職に 学校の防災や施設点検充実

東日本大震災では多くの学校が避難所になりましたが、学校技能主事がいる学校は、ライフラインが確保され、住民を支えることができました。しかし、そうでない学校では、ブレイカーが落ちて配電盤がどこにあるかわからず、右往左往したそうです。また、池田小の事件も忘れられませ

ん。校門の管理や校内の巡回も児童生徒の安全確保には必要です。そこで、県立高校に配置されている技能主事を、学校管理専門職として位置づけると提案しました。教育委員会には「現時点では考えていないが、石巻に派遣している職員にも聞いてみたい」などと回答頂きました。